氏　　名	樋　口　　徹
学 位 の 種 類	博士（経営学）
学 位 記 番 号	乙 第　7 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	製品世代進化と普及に関するライフサイクル理論の考察 ―耐久消費財の製品群単位のライフタイムを通したサプライチェーン構築に向けて―
論文審査委員	主査　高 柳 秀 史　教授 副査　矢 作 恒 雄　教授 今 井 秀 之　特任教授 春 日 正 男　特任教授 篠 原 一 壽　名誉教授

論文の内容の要旨

今般提出された論文（以下本論文と呼ぶ）の研究の目的は、ライフタイムを通した製品群のライフサイクル理論を構築することである。ここで対象とされる製品群は耐久消費財に分類されるものであり、ライフタイムは当該製品群が生産・販売されている全期間を指している。本研究では、ライフタイムを通して安定的かつ効率的に製品を供給するために

－ライフタイム中の製品世代進化のパターンとその影響

－ライフタイム中の普及・リピート購買の変遷とその影響

を明らかにすることを目指している。本論文では、これらを明らかにし、整理することにより、製品進化と普及に関するライフサイクル理論を提唱している。ライフタイムを通して考えることにより、短期的ではない長期的なサプライチェーン・マネジメントの策定に貢献すると考えられる。

本論文は、5 章で構成されている。第 1 章第 1 節で研究の目的が示された後、第 2 節で研究の背景が概観されている。そこでは、もともと自然科学分野で主に研究されてきたライフサイクルの考え方を、ビジネス分野のライフサイクルとしていかに理解するかが述べられている。「製品世代」を横軸に、「対象範囲」を縦軸にとり、これまでの国内外の研究が概観され、本研究がどこに位置するかを示している。特に、図表１－２において、ビジネス分野におけるライフサイクル関連研究の変遷が整理されている。第 3 節は、本論文の構成が示されている。

第 2 章のたまごっちからの教訓では、バンダイによって発売され、一世を風靡したたまごっちを題材として、事例研究を展開している。第 1 節では、たまごっちの沿革と概要が説明され、初代たまごっちで発生したブーム後の悲劇的状況が紹介されている。そして、第 2 節で、この事例の課題をサプライチェーンの視点から整理し、第 3 節においてライフタイムを通した製品群単位のライフサイクル理論の必要性を述べている。

第 3 章「ライフタイムを通した製品群の長期的な変容」は、本論文の中核をなす部分で

ある。ここでは、既存のライフサイクル理論を修正し、本研究の基礎をなす仮説の構築と、民生用エレクトロニクスに属する製品の事例を用いた検証が行われている。具体的には、第 1 節において、まずは製品世代の進化が、次に第 2 節において消費者と購買形態の変化が整理されている。第 3 節で、それらに伴って変化する生産・流通構造の変遷を、プロダクトサイクル理論を通して述べた後、第 4 節において、本論文の中心である製品世代進化と普及に関するライフサイクル理論が提唱されている。その検証は、２種類の時間軸の調整を累積標準正規分布に当てはめ、対象とする製品群に対して行うというものである。

第 4 章「具体的な事例に基づく検証」では、第 3 章で提唱した「製品世代進化と普及に関するライフサイクル」と「長期的サプライチェーン・マネジメント」を民生用ビデオレコーダー産業のライフタイムを通した事例を用いて検証している。具体的には、第 1 節「民生用ビデオテープレコーダー製品群のライフサイクル」、第 2 節「民生用ビデオテープレコーダー製品群の導入期」、第 3 節「民生用ビデオテープレコーダー製品群の世代変化」、第 4 節「民生用ビデオテープレコーダー製品群の普及と生産体制」そして、第 5 節「民生用ビデオテープレコーダー製品群の衰退期」といった具合である。

第 5 章では、今後のサプライチェーン・マネジメントのあり方について総括している。そして、本論文の限界と今後の課題についても記述されている。

論文の内容の要旨

樋口徹氏が提出した学位請求論文について、予備審査委員会を組織し予備審査を行い、その結果を受けて、審査委員会を組織し審査するに至った。審査は、審査委員による個別の査読の後、口頭試問によって行われた。

樋口氏は、作新学院大学において教授職に就いており、過去、数多くの論文、図書を執筆している。また、学会等においても成果を発表し、一定の評価を得ている。この度の本学に対する学位の申請は、そのような過去及び現在における活動を通じて得たものをまとめたものである。

本論文は、表題に見るように、樋口氏が長年研究に取り組んできた「サプライチェーン」に関しするものであり、長期的な視点でサプライチェーンをどのように構築し、そしてマネジメントしていくかについて論じたものである。まず、本論文が高く評価できる点は、第１章第２節で、ビジネス分野におけるライフサイクルに関するこれまでの国内外の研究が概観されているところである。特に図表１－２は、「製品世代」を横軸に、「対象範囲」を縦軸にとり、ライフサイクル関連研究の変遷がとても見やすく整理されている。

そして、本論文の中心は、「製品世代進化と普及に関するライフサイクル」理論の提唱である。それは、既存のライフサイクル理論を修正し、本研究の基礎をなす仮説の構築と、民生用エレクトロニクスに属する製品の事例を用いた検証によって行われている。また、その検証は、２種類の時間軸の調整を累積標準正規分布に当てはめ、対象とする製品群に対して行うという科学的な方法であり、十分評価できる。製品世代進化と普及に関するライフサイクル理論とは、おおまかには、適切な時期区分を行えば、ライフタイムを通して安定的かつ効率的に製品を供給することをある程度制御できるというものである。これは、短期的ではない長期的なサプライチェーン・マネジメントの策定に貢献するものと考えられる。

このように、本論文は高く評価できる一方、いくつかの問題点を抱えている。まず、形式面では、本論文が過去において樋口氏が公刊した論文等を土台にしているため、用語の不統一な部分や、論文としての体裁に若干の不備が見られる。例えば、本研究と記述した箇所と、本稿と記述した箇所がある。あるいは、用語の整理が必要な点もある。製品群、製品世代、製品シリーズ、あるいは流通構造と流通体制などというのがそれである。ライフタイムという用語に関しても、生産開始時点から製品終了時点として用いられたり、対象期間として用いられたりしている。また、その明確な定義は、散在している。その点では、これら用語の意味合いを明確にすることと、論文としての一貫性を図る必要があろうかと思われる。言うまでもなく、若干の脱字等がみられる。さらに、ポーターの邦訳本の誤訳をそのまま引用したと思われる箇所もあった。

たまごっちの事例はとても興味深く分かり易い一方、耐久消費財とするのは、少し無理があるという意見も出された。耐久消費財とするにしても、注釈が必要であろう。さらに、本論文の中核をなす検証部分の数値等の記述に省略が多いため、説得力に欠けるという指摘もあった。

今後の研究の課題として、現代社会への理論貢献を考えると、対象とする事例の範囲を本論文で扱われた場合より、より広げて考えた方が有益であるという意見も出された。

口頭試問では、こうした点について、審査委員からの質疑が展開された。ただ、これらの問題点については、樋口氏の能力に鑑みれば、修正は十分可能であると判断できる。

【審査結果】

本論文は、上記のように詳細部分に立ち入れば、少なからず問題点を抱えてはいるものの、その核となる部分は独創的で、その科学的な検証方法も高く評価されるべきであろう。また、その研究成果が、実学として社会に貢献できる力を持つことも評価される。

以上のことから、審査委員会は、口頭試問で指摘された内容の修正を所定の期日までに行うことを条件に、樋口徹氏に博士（経営学）の学位を授与することが妥当であると判断した。